

固城東外洞遺跡出土倭系土器

武末純一

1 はじめに

ここでは固城東外洞遺跡で出た倭系土器(日本列島に出自を持つ土器)のうち、三江文化財研究院発掘品 107 点を中心に、その位置づけを試みる。これら倭系土器の多くは北部九州の弥生時代後期土器で、高坏(高坏形鉢を含む)が主体をなし、複合口縁壺⁽¹⁾、甕、杵形支脚、円窓付土器、ジョッキ形土器も見られる。ほかに日本古墳時代前期の土師器系土器も少しある。

寺井誠は国立中央博物館や東亜大学校、国立晋州博物館が発掘した固城東外洞遺跡の倭系土器を取り上げ、特に国立中央博物館発掘品の弥生系土器高坏を中心に、次のように述べた(寺井 2008)⁽²⁾。

高坏は単口縁と外反口縁があり、単口縁は無文土器系で脚も無文土器系の中実である。一方、外反口縁は弥生時代後期後半の下大隈式系で、中空脚部だが、坏部と脚部が別々の例しかなく、中実脚部もありうとする。北部九州の下大隈式高坏と比較すると、北部九州例が口径 30 cm 前後なのに、固城東外洞遺跡例は 20 cm 前後で小さく、外湾が強く厚みが不均一な点が異なり、その原因は無文土器の伝統を継承したためとする。このほか、弥生時代後期終末の西新式(西新町式)には、口縁部が直立気味に伸びて頸部に断面三角形の突帯を張り付ける壺((中)31-④)を挙げる。また、比較的小型の脚部を有する高杯((中)34-⑧・⑰)を取り上げ、古式土師器の大きさに近く、製作技法から見ても、⑰は古墳時代初頭か前葉に搬入された可能性が高いとみる。そして、「これ以外にも東外洞遺跡では小振りで中空の高杯脚部がいくつか出土しており、古式土師器の影響を受けた可能性が考えられ、古墳時代前期前葉までの搬入土器もしくはその影響を受けた土器は存在するようである」と述べる。山陰系の鼓形器台((東)図版 10-③)の存在も指摘した。

筆者は(晋)ナ地区 9 号住居出土土器に、弥生時代後期前半の高三瀨式系土器が含まれている可能性を指摘した(武末 2012)。

以下、まず北部九州の弥生後期土器の中で、固城東外洞遺跡出土弥生系土器と関連する高坏・甕および複合口縁壺の変遷を述べる。なお、北部九州の弥生土器はこれまで遠賀川付近を境界に、以東地域と以西地域に大別されてきた。ここでもその地域区分名称に従う。

2 北部九州の弥生時代後期土器

筆者は北部九州の弥生時代後期土器を高三瀨式期(後期前半)、下大隈式期(後期後半)、西新式期(後期終末)に大別し、後続する古墳時代前期初頭・前半の古式土師器は宮の前式期とする(図 1)。寺井のように西新式期をすべて古墳時代とする考えもある。

高三瀨式期の高坏は、中期後半(須玖Ⅱ式期)の水平口縁で半球形の坏身を持つ高坏の系統(平坦口縁系)が主体をなす(図 1-5・15・16)。脚部は須玖Ⅱ式期よりも、漸次短く太くなる。高三瀨式期初頭の水平口縁は平坦面が次第に立ち上がって外傾し、口縁部と坏身の境界が不明瞭になっていく。また、皿状に浅く広がる坏身に短く直線的に内傾する口縁部が付く瀬戸内海系の高坏も、古段階にわずかに見られ(1-6)、新段階には増加して、大型化すると共に口縁部は直立する(図 1-18)。下大隈式期には水平口縁系は消滅する。瀬戸内海系は外反口縁高坏が主体を占めて数も多くなり、口縁部は次第に長く外開きになる(図 1-27・29・38)。脚部は次第に細長くなって、脚裾部には小円孔を穿つ。また、数は少ないが、大きく広がる坏部に極めて短く直立ないし内屈する内屈口縁高坏(図 1-41)もこの時期までに出現し、遠賀川以東地域を中心に分布する。西新式期から宮の前式期の外反口縁高坏はさらに口縁部が横に倒れて長くなり(図 1-48・57)、坏身と口縁が接する屈曲点は、それまでの外下内上から外上内下に変化する。脚部はさらに細長くなり、脚裾部が内湾気味になる。西新式期の内屈口縁高坏は、口縁部を巻き込むようになる(図 1-49)。

高三瀨式期の複合口縁壺は、遠賀川以西地域を中心に、中期後半の細頸袋状口縁壺から変化した大型壺が出現し、屈曲部の稜が次第に明確になる(図 1-1・13・14)。口縁拡張部は内傾内反し、下大隈式期にかけて、頸部中ほどが狭くて上下に広がる形態から、頸部の付け根が最も狭くて上方に広がる頸部に

変化する(図1—25・34)。主に古代の筑前・筑後(福岡県西部)と肥前・肥後(佐賀県・長崎県・熊本県)に分布することから筑肥型と呼んだ(武末1982)。西新式期には口縁拡張部が直立する(図1—44)。この在来系複合口縁壺は宮の前式期まで存続するが、この時期に流入した西日本各地の二重口縁壺の影響を受けて、口縁拡張部が外傾して二重口縁壺化する(図1—52)。

一方、遠賀川以東地域の複合口縁壺は、高三瀦式期に筑肥型が見られるが、下大隈式期には口縁拡張部が内傾外反する豊前型が見られる(図1—43)。西新式期にかけて口縁拡張部が長くなり、外反度が強くなって、直立に近づき、接合部が垂下する(図1—51)。宮の前式期にはやはり口縁拡張部が直立から外傾して二重口縁壺になる(図1—61)。

甕は口縁部が外反する「く」字形口縁となり、高三瀦式期古段階では丸い口縁端部が、次第に方形化する(図1—3・15)。胴が張って底部は平底だが、新段階にかけて平丸底傾向が現れる。下大隈式期では中ほどが外に膨らんで方形の端部を持つ口縁部になり、長胴化が進行して平丸底の底部を持つ。西新式期からは口縁部が薄く長く伸びて湾曲も強くなって丸底化がさらに進み(図1—53)、宮の前式期には丸底になる。

3 固城東外洞遺跡出土(三)弥生系土器

こうした変遷を参照すると、固城東外洞遺跡で出土した三江文化財研究院発掘の弥生系土器は、外反口縁高坏(同形の鉢も含む)が多数で(No.1~10、12~19、21~33、53)、しかもほとんどが下大隈式の系統である。脚部も多くは下大隈式の特徴を示して緩やかに広がり(No.39~44、46、47、49、51、52、54~67、70、71、73~76、78、80~87、90~92)、大部分は小円孔を持つ。小円孔を持てば下大隈式以降の外反口縁高坏か土師器高坏だが、下大隈式期古段階までの外反口縁高坏には小円孔をもたない例もあるため、無孔の脚部にも同様な器形があることを勘案すると、多くは外反口縁高坏の脚部であり、下大隈式期とした。

これらの高坏の器形は北部九州出土例に器形・調整ともに酷似するが、すでに寺井が指摘したように、北部九州例よりも口径が小さく、器壁も分厚くて、固城東外洞遺跡で製作された忠実再現品である。外反口縁高坏の完形品を脚筒上部で切断したNo.24の鉢も、北部九州には存在しない器形で、固城東外洞遺跡での製作の証拠となる。また、脚柱部が中空ではなく、ほとんど中実の脚部であるNo.62、No.63やNo.81も、3個ないし4個の小円孔を持ち、器形も土師器ではなく緩やかに広がる下大隈式である。外反口縁高坏に中実脚部もありうるとした寺井の予測を裏付けた。こうした中実脚部も北部九州の外反口縁高坏には見られないから、やはり固城東外洞遺跡での製作を示す。

このほかNo.38は口縁部が小さく直立し、口径も小さいが小型器台よりは大きく、内屈口縁高坏でも時期が遡る形態と考えた。いったん、下大隈式古段階に位置づけておく。

しかし、No.34~37は平坦口縁系の高坏坏部で口縁部が水平ではなく傾斜し、No.35~37は外面の坏身と口縁の境界が明確でなく、いずれも高三瀦式新段階に属する。No.50・89の高坏脚部も器高が低くて小円孔はなく、やはり高三瀦式に属する。No.89は脚部が太くて大きく広がり、高三瀦式新段階とみられるが、No.50はNo.89に比べて脚部が細く全体的な器形も中期の須玖Ⅱ式高坏脚部に近くて、高三瀦式古段階に遡る可能性が強い。このほか、無孔の高坏脚部のうち、No.45、No.48は脚筒部の径がほぼ同一の長円筒形で脚裾部まで至り、そこから稜は持たずに曲線を描きながらも急激に大きく広がる。後期初頭の平坦口縁高坏の脚部(図4—5)とほぼ同様な器形だから、これらも平坦口縁高坏の脚部とみられ、後期初頭に位置付けられる。No.88も脚筒部が短い、同様な器形で平坦口縁系高坏とみられ、高三瀦式としておく。

また、No.20の外反高坏は、坏身部に対して口縁部が長く伸び、西新式に位置づけられる。脚裾がやや内湾するNo.72やNo.79の脚部も西新式とみられる。

複合口縁壺では、No.101が付け根で締まる口頸部を持つ筑肥型で、口縁拡張部が直立すると共に端部は外反して、西新式期以降に位置づけられる。No.11とNo.96は豊前型である。No.96は口縁拡張部が直立に近いが、まだ単純に内傾しており、下大隈式期新段階である。一方、No.11は口縁拡張部が直立・外反して、西新式期以降とみられる。

No.99は甕、No.100は台付甕である。No.99は球形胴で口径よりも胴最大径が大きく、短い口縁の端部は丸く仕上げられて、底部は平底から平丸底に移行し始める初期の形態を示す。高三瀦式期でも古段階に

遡る可能性がある。No.100 はかなり不安定な平丸底の長胴体部に短い直立気味の口縁部を持つ甕をまず作り、それに低く分厚い台部を付ける。甕本体の形状から見て、下大隈式期に位置付けられる。

円窓付土器はNo.104(図3-3)、No.105の2点である。北部九州の円窓付土器は、当時の伊都国である糸島地域を中心に分布する。柳田康雄による先駆的な論考があり(柳田2002)、永井宏幸が概括した(永井2013)。その変遷は図2の通りで、弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期に本格的に登場し、高三瀨式まではもっぱら甕に円窓が付き、下大隈式期になると台付甕が多い。西新式期以降は台付が見られず、単口縁の無頸壺形態などに円窓が施される。No.104は台付甕で、肩部に横長の円窓が付き、下大隈式期に属する。No.105は無頸壺で、円窓のごく一部が残り、西新式期から宮の前式期に位置付けられる。

杓形支脚はこれまで杓形器台とも呼ばれてきたが、壺類を載せる器台と、炊事用で火にかける支脚は区別するべきであるとの提言(前崎2022)を踏まえて、杓形支脚と呼ぶ。典型例では上端が面をなして傾斜しながら片方が上方に突出するとともに、上面直下がくびれて、脚端径よりも器高が大きい縦長の器形になる。上面は有孔と無孔がある。高三瀨式期古段階に、体部中央がくびれて単純に上下に開く形態やそれを半分に切断した支脚(図1-11)の中から、上端が少し傾いて片方の端部が突出する形態(図1-12)が出現するとみられる。高三瀨式期の新段階でも、通常の上下に単純に開く器形から逸脱しない。まだ上面は形成しないが上端が傾斜して片方がわずかに上方に突出する杓形支脚(図1-23)や、上面ができて片方がわずかに上方に突出する杓形支脚(図1-24)がみられる。下大隈式期には定型化して、上面の傾斜と突出度は大きくなり、上面直下ですばまってから、脚端部へと大きく開き、脚端径よりも器高が大きい縦長の器形がほとんどになり、西新式期へとつながる。こうした変遷と比較すれば、No.98(図3-2)の杓形支脚は、器高が低いほかは下大隈式の特徴を備えている。器高が低くて無孔の例は北九州市長野フンデ遺跡にも例があり(図3-1)、No.98も北部九州弥生系土器である。上面の一部だけが残る有孔のNo.103も、上面直下のくびれが明確で、上面は長円形を描く。No.98・No.103ともに調整は粗雑ではなく、下大隈式期でよい。

No.102(図4-1)はジョッキ形土器の把手部である。ジョッキ形土器は、他に木器もあるため、ジョッキ形容器と総称される。橋本裕行は2回にわたって集成し(橋本2018, 2023)、体部型式はⅠ類～Ⅵ類に大別する。把手は側面形が縦長の「コ」字形を呈するA類と、縦長のアーチ状を呈するB類に大別し、横断面形が円形や隅丸方形のa類と板状・蒲鉾状のb類に細分した(橋本2018)。ジョッキ形土器の分布には瀬戸内海沿岸(兵庫県、岡山県、香川県、愛媛県)と、熊本県(中部九州)という2つの分布圏があり、瀬戸内海沿岸地域は弥生時代中期中葉～後葉、九州および山陰地域は弥生時代後期～古墳時代前期の出土例が多く、中部九州の出土数が群を抜くという。中部九州のジョッキ形土器の把手は、アーチ形で扁平板状となるBb類が圧倒的だが、Aa類に笠形の装飾が付くジョッキ形土器(図4-2・3)もわずかにある。笠形装飾付ジョッキ形土器・木器は中国遼陽地域が源流とみられる。No.102の把手はAa類で、ジョッキ形土器の把手とみてよく、笠形装飾はない。時期の限定は難しいが、下大隈式としても支障はない。No.106は小片だが、Ba類の把手である。ジョッキ形土器の一部か否かは、今後も検討が必要である。

このほか、三江文化財研究院発掘品ではないが、遠賀川以東地域に特徴的な脚付無頸壺が、国立晋州博物館発掘のナ地区9号住居跡から出た(図4-7)。この脚付無頸壺は弥生時代中期後半のブランデーグラス形土器に祖型があり、ほぼ同様な形態の後期初頭(高三瀨式古段階初)例(図4-4)から次第に体部の高さが減って横長になり、下大隈式期古段階の福岡県行橋市例^③(図1-33)を経て、西新式期の北九州市高島遺跡出土例(図1-50)に至る。こうした変遷からみて、図4-7は下大隈式期に位置付けられる。

4 固城東外洞遺跡出土(三)土師器系土器

土師器系土器は、すでに寺井が指摘した通り、古墳時代前期前半の宮の前式期とみられる土器がある。No.66、No.68、No.69、No.77、No.97が該当し、No.97の小型丸底埴を除けば、いずれも高坏脚部である。No.77も小型器台よりは高坏とみておく。高坏脚部はいずれも脚筒部が中ふくらみで、脚裾部も内湾する。脚筒部と裾部の境にも多くは稜がつく。三江文化財研究院の調査ではまだこの時期以降の土師器坏部が出ておらず、弥生系土器に比べると数量は極めて少ない。No.97は外面に稜が付き、全体に北部九州出土品よりも器壁が厚く、本遺跡で製作されたとみられる。

ただし、土師器系土器は古墳時代前期前半に限定されず、No.93の小型丸底埴のように頸部つけねが縮

まって、古墳時代前期後半の福岡市湯納遺跡 D5 溝出土例(図 5-6)とよく似た例もある。また、No.95 の高坏脚部も古墳時代前期前半までは遡らず、福岡市西新町遺跡例(図 5-5)と比較しても前期中ごろとみられる。国立中央博物館が発掘した図 5-2 は、蓋と報告されたが、器形からみて、中ふくらみの脚筒部に短く開く脚裾が付く高坏脚部で、湯納遺跡 D5 溝出土例(図 5-7)と比較しても、やはり古墳時代前期後半に位置付けられる。さらに、国立晋州博物館が発掘したナ地区 2 号住居跡の高坏坏部(図 5-1)は、古墳時代中期後半(5 世紀後半)の須恵器が共伴した福岡県みやこ町タカダ遺跡 B 区 34 号住居の高坏(図 5-8)と同時期とみられ、交流の継続を示す。

このほか、No.94 も倭系土器であることは間違いない。口縁部外面の稜を重視して土師器系二重口縁壺としたが、現地製作品でもあり、時期の特定が難しく、器種認定も今後の検討が必要である。

5 おわりに

以上、固城東外洞遺跡出土倭系土器について、三江文化財研究院の発掘品を中心に述べた。弥生時代後期後半の下大隈式期が多いことは、すでに寺井が指摘した通りである。しかし、今回の検討で、高三瀧式期の弥生系土器が一定程度存在し、それも古段階まで遡る可能性が強くなった。

従って、先行して弥生時代前期末から後期初頭まで、日本列島とくに北部九州との交流の一大結節点であった靉島遺跡の断絶と入れ替わるように、固城東外洞遺跡が北部九州との交流の一大結節点となったことが分かる。特にこれほど多くの外反口縁高坏は、韓国内の他遺跡では知られておらず、弥生時代後期後半の大規模な交流を示す。また、弥生系土器の下限も下大隈式期ではなく、西新式期の外反口縁高坏や複合口縁壺があり、古墳時代前期前半の土師器系土器もそれなりの数量があることは、弥生時代後期終末の西新式期から古墳時代前期前半の宮の前式期にも、その交流がかなりの規模で続いていたことを示す。また、細々とではあるが、5 世紀後半まで交流は続いていたことも、土師器系土器の検討で示した。

これらの倭系土器が、搬入品なのか現地製作品なのかは、今後の更なる検討や胎土分析にゆだねる部分が多いが、今回の検討では、多くが現地製作品とみられる。一方、No.101 の西新式複合口縁壺や、内面をへら削りで仕上げた坏部の下面中央に突出した半球形部を押しつぶしたNo.95 の高坏脚部は、搬入品の可能性が認められる。

固城東外洞遺跡から出た青銅器も含めて弥生時代の交流地域を概観すると、円窓付土器は糸島地域との関係が深く、筑肥型複合口縁壺や、福岡県春日市須玖遺跡群を中心に製作された広形銅矛の出土などからも、遠賀川以西地域の国々の連合体(初期筑紫政権)との関わりの深さが認められる。日本では対馬でしか出土しない平環が出土した点も、そうした国々の連合体の中で、三韓世界との境界となった対馬との関係を示す。一方で、遠賀川以東地域で盛行する豊前型複合口縁壺、脚付無頸壺の存在や、まだ検討が必要だが内屈口縁高坏の可能性のある土器などからみれば、弥生時代後期後半以後には遠賀川以西地域だけでなく、遠賀川以東地域との関係も深まりつつあったことが読み取れよう。

本稿は極めて短期間で仕上げたため、錯誤も少なからずあるとみられ、検討課題も山積みだが、詳細な分析は他日を期して本稿を閉じることとする。成稿に当たっては下記の方々より多くのご教示、ご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

崔鍾圭、禹枝南、蘇培慶、趙晟元、寺澤薫、柴尾俊介、橋本裕行、山崎頼人、平尾和久、上田龍児、松崎友理(順不同、敬称略)

註

(1) 筆者は口縁拡張部が内傾する弥生土器壺を複合口縁壺、口縁拡張部が外傾する古墳時代の土師器壺を二重口縁壺と呼んで、区別している。

(2) なお、本稿では以下、これら 3 機関の報告書図番号および本冊の三江文化財研究院報告書図番号に、それぞれ中、東、晋、三の頭文字を付した呼称を用いる。

(3) 筆者はかつて本例を誤って福岡県嘉麻市原田遺跡住居跡出土として図面を掲載したが(武末 2012)、下稗田遺跡から出土した土器であり、ここで訂正する。

【引用参考文献】

(日本語)

- 市元墨 2019「後漢から三国の把手付容器と公孫氏政権」『花園大学考古学研究論集Ⅲ』
- 苅田町教育委員会 1987『黒添・法正寺地区遺跡群』福岡県苅田町文化財調査報告書第6集
- 北九州市教育委員会 1977『屏賀坂遺跡』北九州市文化財調査報告書第23集
- 北九州市埋蔵文化財調査会 1976「福岡県北九州市小倉南区・高島遺跡」『古文化談叢』第3集
- 北九州市埋蔵文化財調査室 1996『祇園町遺跡3 第3地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第193集
- 北九州市埋蔵文化財調査室 2000『長野フンデ遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第252集
- 北九州市埋蔵文化財調査室 2003『長野フンデ遺跡3』北九州市埋蔵文化財調査報告書第301集
- 北九州市埋蔵文化財調査室 2017『祇園町遺跡第10地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第556集
- 熊本県教育委員会 1992『二子塚遺跡』熊本県文化財調査報告書第117集
- 久留米市教育委員会 1978『東諸富遺跡』久留米市文化財調査報告書第17集
- 犀川町教育委員会 1992『城井遺跡』犀川町文化財調査報告書第3集
- 佐賀県教育委員会 1981『川寄吉原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第61集
- 佐賀県教育委員会 1983『町南遺跡』佐賀県文化財調査報告書第68集
- 佐賀県教育委員会 2015『吉野ヶ里遺跡—弥生時代の集落跡—(第3分冊)—』佐賀県文化財調査報告書第207集
- 武末純一 1982「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』(のちに武末純一 1991『土器からみた日韓交渉』(学生社)所収)
- 寺井誠 2008「中継地の形成—固城東外洞遺跡の検討を基に—」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』上巻
- 鳥栖市教育委員会 1985『安永田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第25集
- 永井宏幸 2013「円窓付どきからみた地域間交流」『柳田康雄古稀記念論文集 弥生時代政治社会構造論』雄山閣
- 日本住宅公団 1978『鹿部山遺跡』
- 橋本裕行 2018「ジョッキ形土器・木器再考」『論集 弥生時代の地域社会と交流—転機8号—』地域と考古学の会
- 橋本裕行 2023「ジョッキ形容器の出現とその背景」『橿原考古学研究所論集』18
- 福岡県教育委員会 1971『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集
- 福岡県教育委員会 1976『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集
- 福岡県教育委員会 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XIX— 八女市室岡所在遺跡群の調査』
- 福岡県教育委員会 1981『三雲遺蹟Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集
- 福岡県教育委員会 1982『三雲遺蹟Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集
- 福岡県教育委員会 2006『西新町遺跡Ⅶ』福岡県文化財調査報告書第208集
- 福岡市教育委員会 1973『小笹遺跡発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 福岡市教育委員会 1974『野方中原遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 福岡市教育委員会 1975『小笹遺跡 第2次発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 福岡市教育委員会 1978『神松寺遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集
- 福岡市教育委員会 1982『西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集
- 福岡市教育委員会 1986『比恵遺跡 第9・10次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集
- 福岡市教育委員会 1995『那珂14』福岡市報告書第399集
- 今津大原小笹遺跡調査会・福岡市教育委員会 1997『小笹遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第541集
- 前崎智行 2022「弥生時代の粗製器台の研究—福岡平野・糸島・杵岐を中心に—」『七隈史学』第24号
- 柳田純孝 1978「野方中原遺跡の遺物(1)—A 溝出土の土器—」『福岡市立歴史資料館研究報告』第2集
- 柳田康雄 2002『九州弥生文化の研究』学生社
- 柳田康雄 1987「高三瀆式と西新町式土器」『弥生文化の研究』第4巻 弥生土器Ⅱ

行橋市教育委員会 1985『下稗田遺跡 弥生時代後期～古代』行橋市文化財調査報告書第 17 集
(韓国語)

国立中央博物館 1992『固城貝塚』国立博物館古蹟調査報告第 24 冊

東亜大学校博物館 1984『上老大島 附：東萊福泉洞古墳・固城東外洞貝塚』古蹟調査報告第八冊

武末純一 2006「勒島遺跡 A 地区弥生系土器」『勒島貝塚 V 考察編』慶南考古学研究所

武末純一 2012「原三国時代年代論の諸問題—北部九州の資料を中心に—」『原三国・三国時代歴年代論』
学研文化社

【図面出典および遺跡一覧】

図 1：1・2・11・12 福岡県古賀市鹿部東町遺跡土器溜(日本住宅公団 1978)、3 福岡市那珂遺跡 41 次 SE016(福岡市 1995)、4・7・8 福岡県久留米市東諸富遺跡住居(久留米市 1978)、5・9・10 福岡県八女市西中ノ沢遺跡 2 号住居(福岡県 1977)、6 福岡市神松寺遺跡 16 号住居(福岡市 1978)、13・14・16・17・19～24 福岡市小笹遺跡 2 次 A 溝・B 溝(福岡市 1975)、15 福岡市比恵遺跡 9 次 10 号井戸、18 福岡市神松寺遺跡 20 号住居(福岡市 1978)、25～28 佐賀県中原町町南遺跡 SX065 周溝(佐賀県 1983)、29・30 北九州市長野フンデ遺跡 3b 土坑(北九州市埋文室 2000)、31・32 北九州市屏賀坂遺跡竪穴遺構(北九州市教委 1977)、33 福岡県行橋市下稗田遺跡 II 地点 9 号住居(行橋市 1985)、34・35・37～39 福岡県糸島市三雲遺跡仲田地区 17 号住居(福岡県 1981)、36・40 福岡市野方中原遺跡 A 溝(柳田純孝 1978)、41～43 北九州市祇園町遺跡第 3 地点 1 号住居(北九州市埋文室 1996)、44～46 佐賀県神埼市・吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡 SH0528 住居(佐賀県 2015)、47～51 北九州市高島遺跡(北九州市埋文会 1976)、52 福岡市西新町遺跡 2 次 D 地区 3 号住居(福岡市 1982)、53～57 福岡県糸島市三雲遺跡サキゾノ I—I 地区 1 号住居(福岡県 1982)、58～60 福岡市野方中原遺跡 F4 区 2a 地点(福岡市 1974)、61 福岡県行橋市下稗田遺跡 I 地点 34 号住居(行橋市 1985)、62～76 固城東外洞遺跡(62(三)No.50、63(三)No.34、64(三)No.99、65(三)No.36、66(三)No.37、67(三)No.70、68(三)No.38、69(三)No.6、70(三)No.15、71(三)No.8、72(三)No.53、73(三)No.96、70(三)No.98、75(三)No.97、76(三)No.68)/図 2(永井宏幸 2013)/図 3：1 北九州市長野フンデ遺跡(北九州市埋文室 2003)、2 固城東外洞遺跡(三)No.98、3 固城東外洞遺跡(三)No.104/図 4：1 固城東外洞遺跡(三)No.102、2・3 熊本県嘉島町二子塚遺跡(熊本県 1992)、4・5 佐賀県鳥栖市安永田遺跡 2 号溝、6 固城東外洞遺跡(三)No.48、7 固城東外洞遺跡(三)No.88、8 固城東外洞遺跡ナ地区 1 号住居(晋)図面 31—105、9 固城東外洞遺跡ナ地区 9 号住居(晋)図面 39—170/図 5：1 固城東外洞遺跡ナ地区 2 号住居(晋)図面 33—117、2 固城東外洞遺跡 1 次調査 1 層(中)6—①、3 固城東外洞遺跡(三)No.95、4 固城東外洞遺跡(三)No.93、5 福岡市西新町遺跡 17 次 9 号住居(福岡県 2006)、6・7 福岡市湯納遺跡 D5 溝(福岡県 1976)、8 福岡県みやこ町タカデ遺跡 B 区 34 号住居(犀川町 1992)